

琉球大学学術リポジトリ

[論文] 小離島における空間認識の一側面(1) :
久高島のサンゴ礁地形と民俗分類

メタデータ	言語: ja 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡久地, 健, 高田, 普久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017677

小離島における空間認識の一側面 (I)

——久高島のサンゴ礁地形と民俗分類——

渡久地 健*・高田 普久男**

I 目的と方法

1. 方名と民俗分類

本稿の目的は、沖縄諸島のなかのサンゴ礁の小離島、久高島の人々の空間認識の一側面を明らかにすることである。すなわち、島を縁どるサンゴ礁を事例に、その微地形にかんする方名(民俗語彙)を記載し、科学的分類(地形学用語)との差異を検討することによって民俗分類の特徴の一端を導きだすことをねらいとする。

まず、本研究における鍵概念である「方名」と「民俗分類」について簡単な定義づけをする必要がある。「方名」(vernacular name)とは、ある土地の人々(民俗)がその環境(空間)やそのなかの動・植物などのあらゆる事象に対して、かれら独自の言葉(いわゆる「方言」)によって与えている呼び名である(松井, 1982, p. 19を参照)。本稿で問題とされる方名はサンゴ礁の微地形に対して久高島の人々が久高島の言葉で与えている一般名詞である。この方名は、人々がかれらを取りまく環境=空間をかれらなりのやり方で分類した結果として生まれてきたものである。たとえば「イノー」という方名は、サンゴ礁という一定の広がりをもった自然を分節し、そこ(「イノー」と呼ばれている部分)がそれ以外のサンゴ礁空間とは異なっていることを認識しているからこそ生じるのである。このように、方名は民俗分類と不可分の関係にある。したがって、方名とは人々が自然な

りある事象なりを分節し分類したものに対して、その土地固有の言葉で与えた一般名詞である、と言い直すことが可能である。

サンゴ礁は最も複雑な生態系の一つであり(Odum, 1975, p. 37)、同時に生物生産力が最も高い生態系の一つでもある(オダム, 1975, p. 65)。島をとりまいて発達するサンゴ礁は浅い水域をなし、外海とは異なって島の人々にとって比較的身近な空間である。また、高い生物生産力に基礎を置くその資源は島の生活と深いかわりをもっている。土地資源に制約がある小離島では、日常的な食物資源の獲得の面でサンゴ礁は重要な位置にある、と考えられる¹⁾。

生活とのかかわりの深い空間を人々は細かく分節し、それぞれ独自の言葉によって呼び分けている。そして、具体的で個別的な場所に対して地名を与え意味づけを行っている。サンゴ礁においても、人々は細かく自然を分類し方名(一般名詞)を与え、同時に具体的な場所に対して数多くの地名(固有名詞)を付けている。逆にいえば、人々がサンゴ礁をどのように分類し、空間を認識しているかを明らかにする一つの手がかりが地名や方名に内包されている、といえる。民俗分類や地名研究の重要な側面がそこにある、といえるであろう。

本稿では、もっぱら方名の分析により民俗分類の特徴を明らかにすることを目的としており、地名の分析は別稿(高田・渡久地, 準備中)に譲ることとする。

* 財団法人沖縄協会

** 早稲田大学法学部

2. 従来の研究

琉球列島におけるサンゴ礁の方名の記録や民俗分類にかんする研究は少ない。体系的なまとまりをもった研究は堀(1980)があるにすぎない。その堀の研究は、与論島の北東海岸を事例に、詳細な地形調査を踏まえた上で、サンゴ礁の微地形構成と方名との対応関係を論じた先駆的な研究である。この堀(1980)の研究は、さらに方名の地域差についても考察し、サンゴ礁の民俗分類の方法論を初めて提示した貴重な論文といえる。島袋(1983)も、沖縄のいくつかの地域での聞き取り調査によってサンゴ礁地形の方名の地域差を提示している。堀(1980)の研究のもう一つの重要な論点は、世代や生業のちがいによるサンゴ礁空間の認識の差異に対しても光をあてている点である。

サンゴ礁地形にかかわる方名の記録は市町村史(誌)においても取り組まれているが、その数は現段階では、『渡名喜村史』(渡名喜村, 1983, p. 926~939)や『座間味村史』(座間味村史編集委員会, 1989, p. 609~612)など数例を数えるに過ぎない。サンゴ礁の方名や民俗分類にかんする研究は、数が少ないというだけでなく、明確な目的をもってなされた研究にいたっては前述の堀(1980)がほとんど唯一である、というのが現状である。

いうまでもなく、方名の収集・記載は研究の出発点である。そして、方名の記録・保存の意義は、その時代の方名を後代に正確に伝えること、および共時的(通文化的)な比較研究において十分に役立つことである(渡久地, 1989)。民俗分類・認識論は、ある意味で民俗の主観を研究の対象としている。しかしながら(否, それだからこそ)、用いられるデータは厳密な科学性が要求される(松井, 1983, p. 79)。つまり、収集・記録された情報を第三者が支障なく利用できるような客観性を備えていなければならない(秋道, 1988, p. 43)。とりわけ、

海(サンゴ礁)にかんする私たちの知識や既存のデータ(地図類など)は陸上の場合とは比較にならないくらい限られているため、記載にあたっては環境図の作成などの基礎的な作業が要求される。それだけにサンゴ礁の方名や民俗分類の研究では、記載における技術的な側面が重視されなければならないであろう。

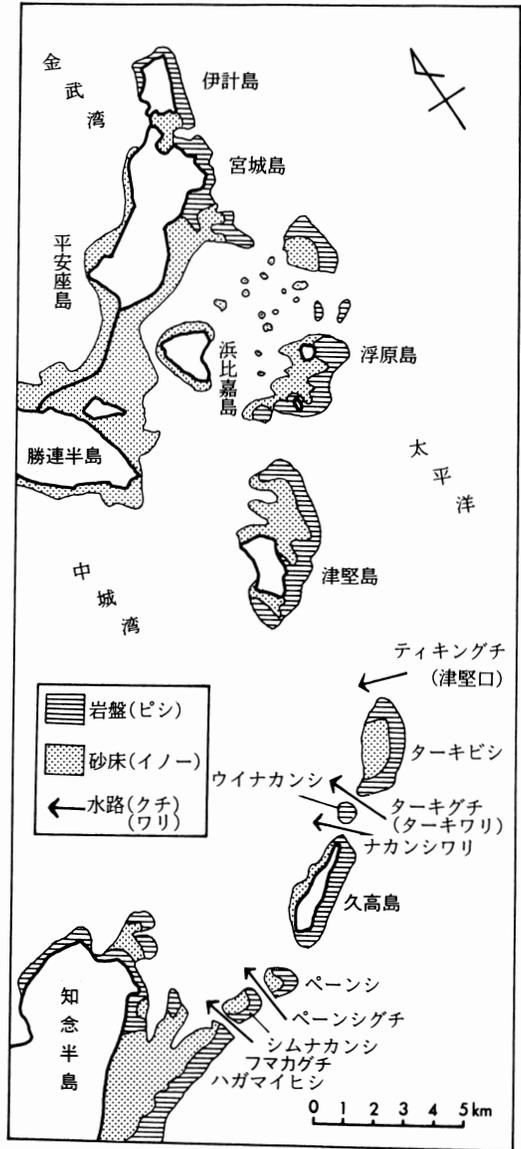
記述における客観性を確保するために、本研究ではサンゴ礁の環境図の作成と微地形の把握に比較的多くの時間を費やした。また、既存のサンゴ礁地形学の成果を踏まえたかたちで記述を行った。サンゴ礁地形の学術用語は主として河名(1987)に従った。

3. 調査対象地域・久高島について

久高島は、沖縄本島南部、知念半島の東方約5.3kmに位置する隆起サンゴ礁の小離島である(第1図)。島は北東-南西方向に伸びる細長い形をしている。島の長さは約3.3km, 最大幅約0.6km, 面積は1.34km²である。最高点は海拔17.5mにすぎない低い島であるが、西側が高く、東側が低い。西海岸は、大半が一連の海崖で縁どられている。

島の人口(12月末の住民登録)は1989年現在273人であり、1960年(641人)の43%, 1980年(358人)の76%である。戸数は1960年129戸, 1970年101戸, 1980年113戸, 1989年111戸であり、減少の一途をたどっている。また、児童生徒数も1972年の126人に対して現在(1989年)はわずか16人であり、著しい過疎化現象が認められる。人口構成(1985年国勢調査)は15歳未満が9%, 15-64歳が63%, 65歳以上28%である。産業別就業者(1985年国勢調査)は、第一次産業67人, 第二次産業3人, 第三次産業78人である。第一次産業は、農業14人, 漁業53人で漁業の比重が高い。漁船数は1989年現在58隻で、3t未満42隻, 3t以上5t未満が16隻である。5t以上の漁船はない。

久高島を調査対象地域として選んだ積極的な理由として、過疎化の進行が著しい島社会において、方名(民俗語彙)を記録・保存しなければならないという緊急な課題があるというほかに、つぎのような点をあげることができる。第一の理由は、久高島が地理的にみて比較的まとまりのある地域をかたちづけていることである。まとまりのある地域ということには二つの意味が込められている。その一つは規模の面である。久高島は小さな島であり、ある一定の目的をもった調査には最適の規模であると考えられる。もう一つは、久高島が「島」であり、比較的完結した世界をかたちづけている点である。しかも久高島の集落は島の南端に塊一つしかなく、一島民の空間認識をとらえるには比較的問題が単純である、と考えられる。第二の理由は、島をとりまく裾礁だけでなく、島の北と南にはいくつかの台礁が存在し、しかもそれらは東西で顕著な差異が認められ地形的なバリエーションが大きく、それと関連して多様な方名の採集が可能であろうという期待である。第三の理由は、久高島ではサンゴ礁で多様な漁撈活動が展開されていること——換言すれば、同島ではサンゴ礁が生活と密接なかかわりをもって存在している点である。久高島で寺嶋(1977)が行った調査によると、25種の漁撈活動のうちじつに19種までがサンゴ礁とその周辺(周辺とは礁斜面などを指している)で営まれており、そこでは《サンゴ礁——多種多様な沿岸性水族——多岐に分化した漁撈活動》という対応関係が成立している、という。



第1図 久高島周辺のサンゴ礁
サンゴ礁の分布は、目崎ほか(1977)による

4. 調査方法

調査は1988年の夏を中心に実施した。調査の内容は大きく、サンゴ礁の地形調査と、サンゴ礁の方名と地名²⁾およびサンゴ礁を利用した漁撈活動にかんする聴き取り調査の二つに分けられる。

地形調査は、まず国土地理院発行のカラー空中写真(縮尺約1万分の1/1977年1月撮影)の実体視判読によってサンゴ礁の地形分類を行い、これにもとづいて現地調査の地点を選定した。さらに現地調査によって地形分類の補正を

行った。現地調査は、地形断面の測量とサンゴを中心とする生物の観察である。

サンゴ礁地形の方名と地名の採集、および漁撈活動の調査は、サンゴ礁を知悉している40～80歳の漁師、20余人からの聴き取りによって行った。したがって、本研究が対象とする空間認識は、サンゴ礁に最も詳しい漁師たちのそれを代表していることになる。方名と地名の採取には、作成したサンゴ礁図とカラー空中写真を併用した。必要に応じてインフォーマントから現地で説明を受ける方法も採用した。

II サンゴ礁地形の概観

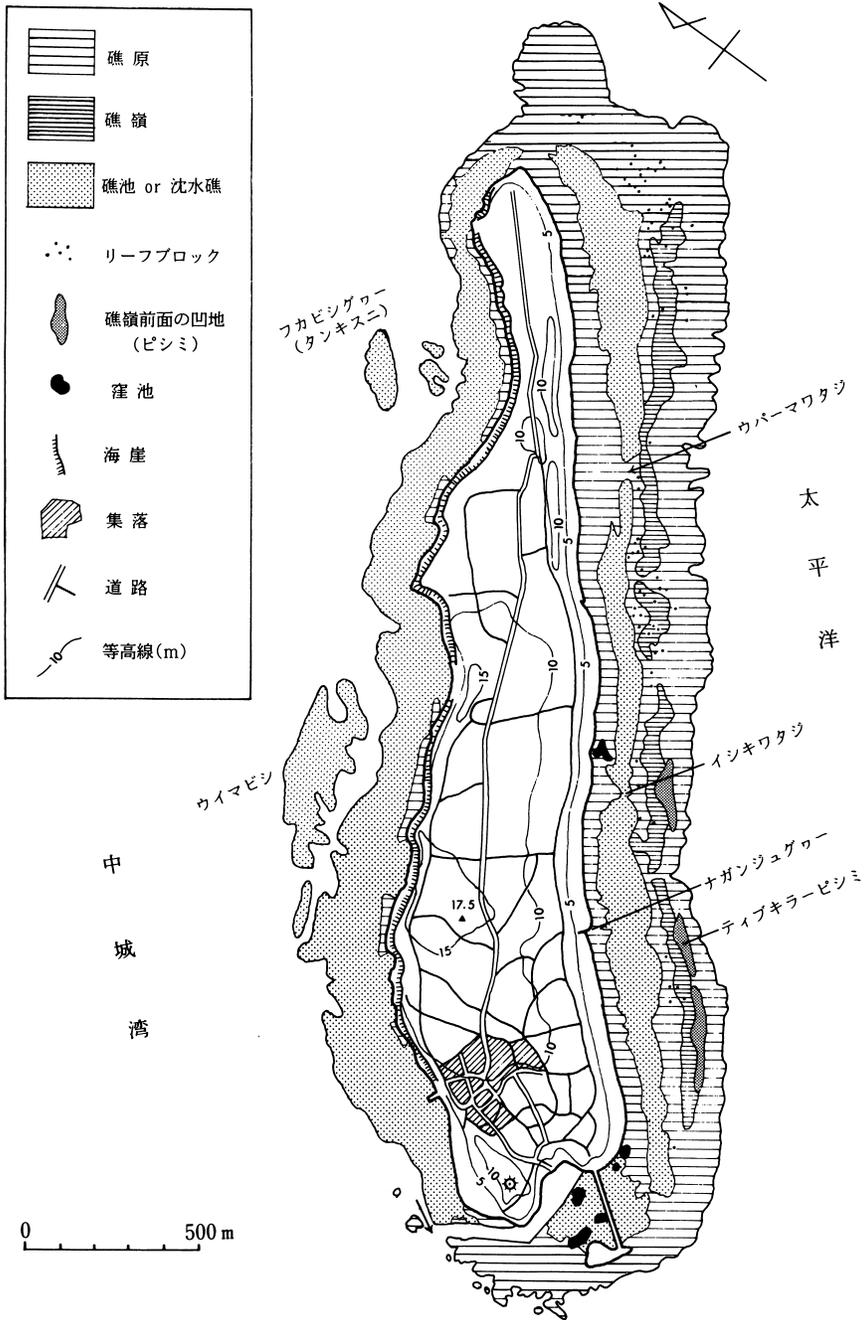
久高島は第1図に示すように、沖縄本島の知念半島から中城湾口を経て金武湾口に至る弓状に連なる一連の「島々と台礁群」の一部を構成する。これらの島々をとりまいて発達する裾礁 (fringing reef)、および水路によって島から隔てられて分布する台礁 (platform reef) は、東側 (太平洋側) と西側 (中城湾側) とでは地形的にみて大きな差異が認められる (目崎ほか, 1977)。すなわち、岩盤からなる狭義の礁原 (reef flat; 干瀬) の発達は東側においてよいのに対して西側では極端にわるい。西側のサンゴ礁はほとんどが砂質の礁池 (moat; イノー) である。久高島も例外ではなく、島の東西でサンゴ礁の形態に大きな差異が認められる (第2図)。

久高島の東側のサンゴ礁は、幅100 m程度、水深1～2 m程度の礁池をもつ典型的な裾礁である (第3図の断面①③④)。目崎 (1980) の分類に従えば、外洋側に干瀬 (前方礁原) があって、その内側にイノーを抱える「干瀬-イノー型」のサンゴ礁である。サンゴ礁の幅は300～550 m (平均幅は364 m) であり、島の北東部で最も広く (約560 m)、中央部で最も狭い (約300 m)。低潮時には礁池の部分を除いて干出する。縁脚-縁溝系 (spur-groove system) の発達も良好である。礁池内は、中

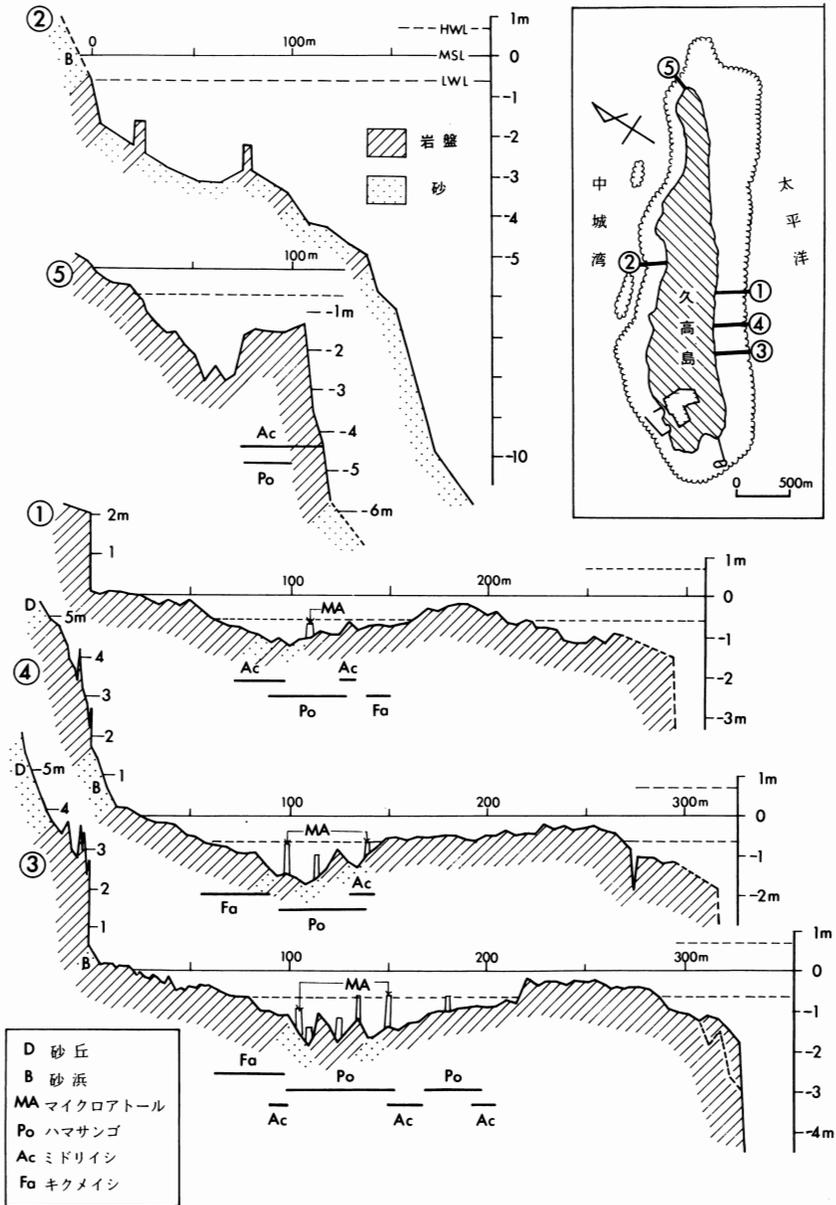
央部にごく薄く (5～10cm) 砂礫が堆積しているが、大部分は岩盤である。礁池内に分布するサンゴは塊状ハマサンゴが目立つが、キクメイシやミドリイシもみられる。ハマサンゴはマイクロアトール (microatoll) をつくることがある。礁池の内側 (海岸寄り) には幅50～100 mの岩盤 (後方礁原) が発達している。その岩盤の内側には、部分的に岩盤を覆うかたちで発達する砂浜が分布する。砂浜の幅は、場所によって異なるが、およそ10～30 m程度である。後方礁原の背後には海拔高度3～5 m、幅20～40 m程度の離水サンゴ礁がよく発達する。その離水礁の上には一連の海岸砂丘が形成されている。砂丘の幅は50 m前後、海拔高度は7～10 m程度であり、アダン、モンパノキ、クサトベラなどの海岸植物が繁茂している。砂丘の陸側の縁に沿って、テリハボクヤフクギなどの樹種で構成される見事な防風林が造成されている。以上が海岸部を含めた東側のサンゴ礁の概要である。

これに対して、島の西側のサンゴ礁はほとんどが砂で覆われ、岩盤の発達がわるい (第3図の断面②)。目崎 (1980) の分類に従うと、ほとんどすべてが干瀬 (前方礁原) を欠いた「イノー型」のサンゴ礁である。低潮時に干上する部分は汀線付近のわずかな範囲にすぎない。西側の海岸線は集落の北から島の北端まで、比高5～15 mの海崖によって縁どられており、崖下には多くの転石がみられる。低平な離水礁とそれを覆って発達する砂丘とによって特徴づけられる東側の海岸とは対照的である。以上の久高島のサンゴ礁の東西比較を第1表にまとめた。なお、島の北東端のサンゴ礁 (第3図の断面⑤) は、形態的にみて「干瀬-イノー型」に分類できるが、外側の高まり (前方礁原) は、東側のサンゴ礁のそれに比較してレベルが低く (つまり水深が深く)、盤状のミドリイシなど種々のサンゴが成育している。

小離島における空間認識の一側面 (I)



第2図 久高島のサンゴ礁環境図
地名は本文にてでくるものだけを記入した



第3図 久高島のサンゴ礁の地形断面とサンゴの分布

第1表 久高島サンゴ礁の東西比較

	東側 (太平洋側)	西側 (中城湾側)
サンゴ礁の幅 ¹⁾ (平均値) (標準偏差)	300~550 m (364 m) (79 m)	100~200 m (154 m) (43 m)
形態 ²⁾	干瀬-イノー型	イノー型
底質	岩盤	砂質
縁脚-縁溝系	顕著に発達	発達が悪い
リーフブロック	多い	少ない

1) サンゴ礁幅は、作成したサンゴ礁図 (第2図) の上で、海岸線に沿って200m間隔で測定して求めた。島全体の平均幅 (標準偏差) は259m (123m) である。

2) サンゴ礁の形態は、目崎 (1980) の分類による。

久高島の南と北にある台礁 (第1図) も漁場として重要な存在である。そのなかでも島の北方約1.5 kmに位置するターキピシは、久高島と同島をとりまくサンゴ礁とを合わせた面積とほぼ同程度の規模を誇り、久高島のみならず津堅島など周辺の島々の漁師にとっても重要な漁場である。その台礁は外洋側で岩盤 (狭義の礁原: 干瀬) の発達がよく、その平面形態は全体として馬蹄形を呈している。その馬蹄形の礁原の内側には水深2~3 mの礁池 (イノー) を抱え、サンゴと砂とが織りなす縞模様 (stripes) は見事である。冬季の季節風と波浪をまともに受けるターキピシの北東部の礁原には、リーフブロック (転石; reef block) が無数に点在している。このリーフブロックは礁池内にも多く認められる。これらのリーフブロックはおそらく暴風時の波によって礁斜面からもたらされたものであろう。

III サンゴ礁の微地形と方名の記述

サンゴ礁は最も複雑な生態系の一つである。

しかし、それは海岸から礁縁にかけて規則性をもった地形的・生物的な配列、いわゆる分帯構造 (zonation) をつくっている。第4図は、第3図に示した地形断面をもとに描いた久高島東海岸のサンゴ礁の立体模式図である。図の左が陸側で、右が海側である。以下に、この図を中心にサンゴ礁の微地形に与えられた方名について記述する。第4図の左端から順にみていこう。なお、[] のなかは省略される場合があることを意味する。

モーンミー: 雑木や草が生い茂る原野。

ハン [畑]: 短冊型に地割がなされている。

アダンパヤマ [海岸砂丘]: アダンが生い繁るので「アダン (阿檀) ・パ (葉) ・ヤマ (山)」という名で呼ばれているものと思われる。砂丘の内側 (陸側) にはフクギ (方名: [シマ] ヤラブ) とテリハボク (方名: ウブシマヤラブ) などからなる防風林並木がある。フクギもテリハボクもいずれも方名は「ヤラブ」であり、両者の区別が「シマ (島)」と「ウブシマ (大島; 沖縄本島の意)」の接頭辞でなされているのは



写真1 ナガンジュグラー

久高島で最も大きい「ンジュ」の一つ。東海岸の「イシキバマ」の南端に位置し、離水サンゴ礁（「シバナ」）を深く刻み込んでいる。（1988年9月10日撮影）

しいことは不明である。

ビシク：地形学用語でいう後方礁原に相当する部分。タイドプール（tide pool）が形成されていることが多い。

フマイ：サンゴ礁のなかの凹地形の一つ。「窪池」の意。一般には、周囲と明瞭に境界づけられる地形的なへこみである。第4図ではビシクのなかのフマイを表現しているが、第2図からわかるようにイノーのなかにもフマイがある。また、ターキピシ（第1図）の中央部に「ワタグムイ」という地名をもつフマイがあるが、これは比較的広く、かつ周囲との境界が明確でない。このようなフマイは、石垣島の白保（渡久地・目崎、1987）の礁池のなかに認められるクマイ（礁池のなかでも底が砂からなる比較的

深い部分＝砂床）との類似性が指摘できる。

イノー〔礁池〕：薄く砂が堆積している。大潮の低潮時でも干上がらない。サンゴ礁のなかで生物相が最も豊かな場所の一つであり、さまざまな種類のサンゴが生息している。ただし、海岸部の浅い所は、直径数cm～十数cm程度の小さなキクメイシやウニなどが分布するものの、生物相は比較的貧弱である。

ガマク：礁嶺（後述のピシ）の背後（内側）に位置する浅い平たい部分。その幅は第3図の地形断面や第2図のサンゴ礁の環境図からわかるように50m前後である。低潮時の水深は場所によって多少差があるが、大体30cm前後である。そこには背の低い小規模のマイクロアトールがみられることが多い。

ワタ〔ン〕ジ：ビシクとピシとを結ぶイノーのなかのブリッジ状の地形的な高まり。「渡地」の漢字をあてることができよう。ここを歩いて海岸からピシに渡ることができ、サンゴ礁の利用（魚介類の採取を中心とする漁撈活動）において重要な地形的存在である。完全に結んでなく、イノーが極端に狭まっている場合もある（イシキワタジ）。このような地形（ワタ〔ン〕ジ）の存在は、石垣島の白保（渡久地・目崎、1987）のサンゴ礁でも知られている。

ピシ：前方礁原のなかで地形的に最も高い部分。地形学用語では礁嶺³⁾（reef crest）。干潮時には干出する。「干瀬」の漢字をあてることができる。しかし、第2図の「フカピシグラー」や「ウイマピシ」の礁地名からわかるように、干出しない沖合に独立して存在するいわゆる沈水礁（submerged reef）に対しても「ピシ」という呼び名を与えていて、地名から判断する限り、必ずしも干出するものだけを指していない。

ピシミ：礁嶺の前面（外洋側）に位置するごく浅い堀で、平面形態は瓜状あるいはナマコのような形をしている。比深は10～20cm程度。潮



写真2 ティブキラーピシミ

大潮の干潮時には、久高島東海岸の礁嶺（「ピン」）は完全に干上がる。「ピン」の背後には、場所によってごく浅い（比深約10～20cm）堀状の地形「ピシミ」が形成されている。この写真は、写真1の「ナガンジュグワー」前面の「ピン」と、その背後に位置する「ティブキラーピシミ」（地名）である。（1988年9月10日撮影）

位によっては認識されにくいことがある。大潮の低潮時に最もよく識別できる（写真2）。このピシミは久高島の東側のサンゴ礁の全域でみられるものではなく、第2図に示したように3ヵ所が知られている。国土地理院発行の空中写真（1977年1月撮影）からは礁縁部の碎波（白い帯）のためピシミを判読することは容易ではないが、目崎（1988）の『南島の地形』74頁の写真がそれをはっきりととらえている。

クンディ：礁原上のリーフブロック（転石）のこと。干潮時には干出する。群れをなしていれば「ブリ（群）クンディ」という。

ブタ：イノのなかにある比較的大きな岩塊のこと。一見、前記のクンディと似た地形であるが、聴き取り調査を総合すると、ブタは根をもった固定したサンゴ塊を指していると考えられる。大潮の干潮時には海面上に露出するが、通常は海面下にあるので、漁師はその存在に十分な注意を払いながら舟（サバニ）を操る。

クチ：礁嶺（ピン）が切れている部分（ごく浅い水路）で、サバニの出入口として重要な地形的存在である。なお、第1図に示したクチ（島と台礁の間の水路や、台礁間の水路）については第3表を参照されたい。

ワリ：縁溝（groove）やサージチャネル（surge channel）など、サンゴ礁外縁部の細い溝状の割れ目を指す。ただし、第1図の「ナカンシワリ」は島と台礁の間の水路であり、「ウチワリ」は沈水礁のなかの細長い湾入部である（第2表を参照）。

キンター／ピンター：いずれも礁斜面（reef slope）であるが、前者は急な、後者は緩やかな礁斜面を指し、両者を全く異なった方名で呼び分けているのは興味深い。

ピシヌフシ：「干瀬の後」の意味で、ピンの背後（外洋側）を指している。キンター、ピンター（礁斜面）を包含する。

このように、久高島の人々は、海岸から礁縁

小離島における空間認識の一側面 (I)

第2表 サンゴ礁の方名とそれが指し示す地形 (第4図に示したものを除く)

方 名	事例 (地名)	語 意	地形, および特徴
ワリ ¹⁾	<u>ワリグ</u> ー; <u>ターキワリ</u> (別名= <u>ターキグチ</u>); <u>ナカンシワリ</u> ; <u>ウチワリ</u>	割	サンゴ礁とサンゴ礁間の水路. ただし「ウチワリ」の場合は沈水礁のなかの細長い湾入部である.
クチ ²⁾	<u>ペーンシグチ</u> ; <u>ターキグチ</u> (別名= <u>ターキワリ</u>)	口	島と台礁, 台礁と台礁間の水路
リー	<u>カチャーリー</u> ; <u>ブローリー</u> ; <u>イチャリー</u>	石	大きな岩, 特に海側に突き出た岩を指す.
シ/ヒシ ³⁾ /キシ	<u>ペーンシ</u> ; <u>ターキビシ</u> ; <u>ウイギシ</u> ; <u>フカビシグ</u> ー (別名= <u>タンキスニ</u>)	干瀬; 岸	礁原, 台礁 (干出しない台礁=沈水礁も含む)
スニ	<u>タンキスニ</u> (別名= <u>フカビシグ</u> ー)	曾根; 洲根	干出しない台礁 (沈水礁)
ヤー	<u>ナミスヤー</u> ; <u>イエースヤー</u>	家; 住処	多くは窪地や割れ目などの凹地形
スムトゥ	<u>ウブスムトゥ</u>	潮元	斑礁. 航海上危険な存在である.
ガマ	<u>イラブーガマ</u>	洞穴	海岸の洞穴. サンゴ礁の中の洞穴
ハンタ	<u>タカバンタ</u>	崖	海崖
パーラ/ヤーラ	<u>ウパーラ</u> ; <u>ウヤーラ</u>	原	礁原, または海崖背後の段丘上などの広々とした平らな面
シキ	<u>インキ</u> ; <u>イチャジキ</u>	敷	平らな岩盤が広がっているところ
ワタ	<u>ワタグムイ</u> ⁴⁾	曲 (わた)	サンゴ礁外縁部の緩やかな湾入部
シマ	<u>フシマ</u>	島	島

- 1) 第4図の「ワリ」は縁溝やサージチャンネルを指している. ここに掲げる「ワリ」はそれとは地形学的に明確に区別されるので, 別扱いした.
- 2) この「クチ」は第4図の「クチ」(前方礁原の切れ目)とは地形的に明らかに異なるので別扱いした.
- 3) ここに掲げるヒシ (例: フカビシグー) は, 島をとりまくビシ (礁嶺) とは異なって, 島から独立して存在する台礁で, しかも干出しないので, 別扱いした.
- 4) ターキビシに「ワタグムイ」という地名がある. 「ワタ」と「グムイ」の二つの方名を組み合わせて特定の場所を指示する固有名詞である.

に至る一連のサンゴ礁空間を細かく分節し、その分節化された各部分に対して独自の呼び名(方名)を与えている。つまり、サンゴ礁の微地形構成に対応したかたちで、サンゴ礁空間を細かく分類し、呼び分けていることがわかる。なお、第4図の、海岸から礁縁に至る一連の微地形配列を中心に上げた方名以外の、主要な地形にかんする方名を第2表に整理しておく。これは、地名の分析(別稿)から導きだされた方名である。

Ⅳ 民俗分類と科学的分類との比較

前二章(Ⅱ, Ⅲ章)では久高島のサンゴ礁地形を概観し、サンゴ礁の微地形に対して与えられた方名について記述してきた。その際、方名の説明はできるかぎり既存のサンゴ礁地形学の用語を用いて記述した。ところで、民俗分類(方名)と科学的分類(地形学用語)とはいかなる対応関係を示しているのであろうか。本章では、これを検討することによって民俗分類の特徴の一端を明らかにしていきたい。

前章までの記述からいえることは、大局的に

みれば久高島のサンゴ礁にかんする民俗分類(方名)は科学的分類(地形学用語)とよい対応関係がみられることである。これは、堀(1980)が与論島のサンゴ礁における研究で指摘した一つの結論と一致する。地域は異なるが、近森(1988, p. 85~88)もポリネシア・アウトライア(Polynesian outlier)の一つレンネル島において似たような対応関係の存在を示唆している。また、reef-lagoon system によってとり囲まれるミクロネシアの島々の土地保有にかんする Sudo (1984) の研究にもサンゴ礁地形の方名が記述されており、そこにも同様な対応関係を読みとることができる。

民俗分類と科学的分類とがよい対応関係を示す理由を、堀(1980)はつぎのように説明している。《サンゴ礁は造礁性生物群集がつくる地形であるため、すぐれた生態的な地形である。一方サンゴ礁を利用する人々も礁地形の生態的側面を熟知してこそ魚介類を採り、礁内を移動できる》。それゆえ、民俗分類は科学的分類と「結果的によい対応を示す」(堀, 1980)のである(下線は、引用者)。しかし、この堀の限定

第3表 民俗分類と科学的分類のズレ

ズレの種類	「方名」《地形学用語》
(a) 対応する地形学用語がない方名(第4図を参照)	「ガマク」「ビシミ」「ワタ〔ン〕ジ」「ヤートー」など
(b) 方名のない地形学用語	《縁脚》
(c) 一つの地形学用語に対して複数の方名があるもの	「キンター」／「ピンター」《礁斜面》
(d) 指し示す地形の範囲にズレがあるもの	「ビシ」《前方礁原》；「イノー」《礁池》
(e) 異なった地形に対して同一の方名を与えているもの(第2表を参照)	「ビシ=ヒシ」《前方礁原》／《沈水台礁》 「ワリ」《縁溝》／《水路》など 「クチ」礁嶺の切れ目／島と台礁、台礁間の水路
(f) 時間の推移によって異なった方名を与えている場合	「ウジ」と「ビシミ」の関係(第5図を参照)

的な表現からも窺えるように、両者の分類原理が同じであるとは考えにくい。南西諸島において、植物を中心に民俗分類の構造と機能について詳細な研究を行った松井 (1975 a, 1975b) は、植物の民俗分類と系統分類との対応の意味づけには十分慎重である必要がある、と述べている。久高島においても、サンゴ礁の民俗分類と科学的分類との間にはたしかに基本的にはよい対応関係が認められる。しかし、仔細にみると両者の間には微妙なズレが存在している。民俗分類の特徴を明らかにし、それによって人々の空間認識にアプローチしたい私たちにとって、この小さな差異こそが重要なのである。

久高島におけるサンゴ礁の民俗分類と科学的分類との微妙な差異は、第3表に整理した(a)~(f)の6点である。以下これについて若干の検討を加えることにする。

(a) 対応する地形学用語がない方名

「ガマク」「ピシミ」「ワタ〔ン〕ジ」は明瞭な地形的存在である。「ガマク」は前述のとおり、礁嶺(ピシ)の内側に広がる、低潮時の水深30cm程度の平らな地形に対して与えられた方名である。久高島の人々に対して「そこはピシですか、それともイノーですか」とたずねると、「ピシでもあり、イノーでもある(あるいは、ピシでもなければイノーでもない)」というあいまいな答えが返ってくることが多い。この返事からして、ガマクは、いわばピシでもイノーでもある(ない)両属的な存在である、ということもできるであろう(渡久地ほか, 1989)。しかし、人々がその地形的存在をはっきりと認知していることにはかわりない。ピシの内側に広がるガマクの存在は、イノーを横切ってピシに渡るとき、そこに至って水深が急に浅くなるため、身体的にはっきりと感知される。身体的に感知されるということが、民俗分類では一つの重要な要素であると考えられる。それと同時に、わずかな水位の差異——この場合は干潮時

に干上がるか否かということ——は、生物分布のちがいを生む決定的な要因でもある。このようなことから、民俗分類が「ガマク」という方名を生んだ理由は、生物分布に大きく左右される漁撈活動の観点から、つまり機能的側面から説明することも可能であろう。

一方、地形学は、この「ガマク」の部分に限定して与えた独自の用語(ターミノロジー)をもたない。これまでの地形学者の分類をみると、多くの場合、「ガマク」の部分前方礁原の一部として分類していることがわかる(たとえば、目崎ほか, 1985)。本稿の第2図のサンゴ礁の環境図(地形分類図)でも「ガマク」の部分は前方礁原として分類されている。しかし、数十cm単位でのレベルの差異を問題とするようになった近年のサンゴ礁地形学が、「ガマク」の部分を見落としているとは考えにくい。事実、久高島のサンゴ礁との類似性が高い伊計島の東側のサンゴ礁の地形分類図(Yamanouchi and Hasegawa, 1988)をみると、前方礁原を‘higher level’(高位)と‘lower level’(低位)に細分しており、後者(低位の前方礁原)は、ここで問題にしている「ガマク」に対応しているように思われる。しかし、ここで注意しなければならない点は、地形学の分類がわずかなレベル(水位)の差異を見落としていないにしても、前方礁原を「高位」と「低位」という一種の形容詞で細分しているにすぎないという点である。「高位の前方礁原」も「低位の前方礁原」もともに前方礁原という同一カテゴリーに含まれていることにはかわりないのである。すなわち、これは、両者が異なった言葉によって呼び分けられているというよりもむしろ、形容詞(高位/低位)によってカテゴリー内のちがいを表現している、と理解すべきものである。一方、民俗分類における「ピシ」と「ガマク」は異なった言葉によって完全に呼び分けられており、両者は久高島の人々にとってはまったく

異なったカテゴリーに属する存在である、といえる。

地形学が、民俗分類において「ガマク」と呼ばれている部分を、前方礫原の一部として分類する理由は、おそらく形態の成因（地形プロセス）や発生（地形発達）の解明を目的とする地形学の方法論そのものと関係している、と考えることができよう。つまり、地形形成の観点からみれば、「ガマク」にあたる部分も、ピシの部分を含めた前方礫原全体とほぼ同次元でとらえることができるからである。

つぎに、方名の「ワタ〔ン〕ジ」に対応する地形学用語が存在しないことをどう理解すればよいか。「ワタ〔ン〕ジ」という方名は、地形学者による地名調査（渡久地・目崎，1987）からも報告されているが、これに対する独自の地形学用語は存在しない。地形学的にみると「ワタ〔ン〕ジ」の部分は、前方礫原と後方礫原とが結合した部分、もしくはかなり接近した部分として理解することが可能であろう。別の見方をすれば、礫池がそこにおいて消失もしくは極端に狭まっている、と理解することができる。このことから、礫池の幅を W_m とすれば、地形学者は「ワタ〔ン〕ジ」の部分を、 $W_m = 0$ あるいは $W_m \cong 0$ としてとらえていることになる。そのようなとらえ方からは、当然「ワタ〔ン〕ジ」は認識されない。したがって新たな用語を必要としない。このような地形学の地形分類（空間認識）は、空中写真などを利用し、全体の地形を視野に入れた上で、地形面の連続性を追跡していくという地形学の一つの方法論（地形分類の手法）に起因しているものと考えられる。これに対して、島の人々にとっては「ワタ〔ン〕ジ」がサンゴ礁利用においてきわめて重要な地形的な存在であることはすでに述べた。つまり、「ワタ〔ン〕ジ」を伝えて「ピシ」に渡れば、下半身のわずかな部分を濡らす程度で済むのである。相対的に深い「イノー」を横断してピシ

に渡る場合とはまったく事情が異なる。

「ピシミ」は、第3図の断面④、③がその断面形態をはっきりとらえている。礫嶺前面のレベルの低い平坦面に対して地形学は‘spur upper platform’ という用語を与えている例（菅・作野，1989）はあるが、そこに凹地形をはっきりと認識し独自の用語を与えることはない。これに対して、サンゴ礁を利用する久高島の人々はわずかなへこみをはっきりと認識し、そこに「ピシミ」という固有の呼び名（方名）を与えて、特別の意味づけを行っている。この「ピシミ」は、漁撈との関連で重要な場であるという機能的な側面だけでなく、サンゴ礁（干瀬）を絶えず利用している人々にとっては、その存在が視覚的にもはっきりと識別されている、といえるであろう。長い生涯にわたって繰り返しサンゴ礁を利用している人々は、さまざまな季節、いろいろな時間帯においてサンゴ礁を細かに観察している。とりわけ、「ピシミ」という地形的存在は、大潮の干潮時のわずかな時間帯に限って観察されるものであり、数回程度の地形調査からは容易にその存在を意識（認識）することはできない。事実、著者らは方名の採集以前に、海岸から礫縁に至る地形の測量と観察を終えていたが、漁師に「ピシミ」という方名を教えられる前までは、その地形を認識することはなかった。前掲の写真2は、その「ピシミ」を撮ろうと思って撮ったものではなく、聴き取り調査の後で、地形調査の時に撮影した写真のなかから「再発見」されたものである。その事実はきわめて意味深長である。そして、地形的にはっきりと識別されるということは、命名行為においてあるいは方名の持続性において重要な条件である、と思われる。

(b) 方名のない地形学用語

サンゴ礁の外縁を特徴づける地形として縁脚—縁溝系（地形学用語）の存在がある。地形学では、脚と溝（凸と凹）をセットとしてとらえ

ている。民俗分類は縁脚に相当する方名をもたない。民俗のまなざしは溝（凹地形）だけに向けられている、といえる。サンゴ礁を利用する人々にとって、一般に凹地形がとくに重視されているように思われる。その理由として、凹地形こそが魚の恰好の住処を提供していることを指摘することができるであろう。むしろ、凸地形を軽視しているのではない。前述の「ブタ」（礁池のなかの岩塊）や海底（あるいは礁斜面）から突き出た斑礁（pached reef; 第2表に掲げた「スムトゥ」）は、航行上危険な存在として認識されている。

(c) 一つの地形学用語に対して複数の方名があるもの

勾配の緩急に関係なく礁斜面（reef slope）という一つの用語しかもたない地形学に対して、「キンター」（礁斜面が急である場合）と「ピンター」（緩やかな場合）というまったく異なった二つの方名を久高島の民俗分類はもっている。久高島の漁撈活動を詳細に記述している寺嶋（1977）の研究からもわかるように、緩やかな礁斜面（ピンター）は網漁など漁撈活動の場所としてきわめて重要であり、急な礁斜面（キンター）とは明確に呼び分けられている。このことは、ウォーフ（1978）がエスキモー語の雪にかんする言葉の研究で明らかにしたこと——つまり関心の度合いが高ければそれだけ分類は細かくなり語彙が豊富になっていくという事例との関連で理解することができよう。

(d) 指し示す地形の範囲にズレがあるもの

第4図には、方名と地形学用語とが並記されている。両者の対応は整然とした形で描かれている。しかし、方名が指し示す範囲は決して地形学のように明確ではない、と思われる。先ほどの「ガマク」は「ピシ」であり「イノー」でもある。この両属的な「ガマク」の存在ゆえに、「ピシ」と《前方礁原》、「イノー」と《礁池》が完全には重ならないことになる。

(e) 異なった地形に対して同一の方名を与えている場合

「ピシ」「ヒシ」は、一般に「イノー」（礁池）を隔ててサンゴ礁の外洋側に位置し、干潮時には干出する帯状の岩盤に対して与えられた呼び名（一般名詞）である。しかし、地名（固有名詞）を調べてみると、島を縁どるサンゴ礁から離れて分布し、大潮の干潮時にも干上がることのない沈水した台礁に対して「ヒシ」を付した地名が実在している。久高島の北側の沖合約400 mに位置する「フカビシグラー」（語意は「外側の小さな干瀬」、別名「タンキスニ」）と、島の中央部から沖合約300 mにある「ウイマビシ」がそれである。（第2図参照）。

沖縄諸島では、ヒシ（干瀬）は広義にはサンゴ礁を意味する。そして、ヒシという語は、裾礁の外洋側に位置する干出する岩盤（狭義の干瀬）だけでなく、干出しないサンゴ礁を指す場合もある。たとえば、本部半島の海洋博記念公園～瀬底島間の海域には約30個の台礁や離礁が分布しており、内側に位置するものは干出しないにもかかわらず「ヒシ」と呼ばれている。久高島でもこれと同じことがいえるわけである。しかし、ここで注意しなければならない点は、島を囲繞するサンゴ礁において、大潮の干潮時にも決して干上がることのないような部分を「ヒシ」と呼ぶことは通常ない、という事実である。干潮時にも水を湛えている部分は「イノー」と呼ばれるのが一般的である。ただし、島を縁どるサンゴ礁全体を「シマビシ」（島干瀬）と呼ぶことはある。この場合の「ヒシ」は広義に使われているのであり、「イノー」と対照して用いられる「ピシ」とは明らかに位相（言葉の用いられるレベル）を異にしている。干出しないにもかかわらず「ヒシ」と呼ばれるのは、それが沖合に独立していること（つまり台礁であること）が一つの条件である、と考えられる。

「フカビシグラー」が「タンキスニ」という

別名称(第2表)をもっていることは民俗分類を考えるにあたって興味深い問題を提起しているように思われる。このような事例は西表島にもある。鹿川湾に干出しない円形の台礁があるが、それは「ナズニ(中瀬)」という地名のほかに「ウランタバ^{ピー}」という別名称をもっている(川平ほか, 1990, p. 66~72)。八重山諸島の「ピー」は沖縄諸島の「ピシ, ヒシ」に対応する一般名詞である。「スニ」の付く別の地名をもっているという事実は、少なくとも言葉の上からみて、これらの台礁が「スニ」として認識されているという側面を示唆している。「スニ」とは、一般につねに海面下にある地形的高まりを意味する言葉であるから、おそらく、干上がらない台礁を「ヒシ」とも「スニ」とも認識していることは十分にあり得ることであろう。後者においては、多分に漁場、つまり一本釣りなどの漁撈活動が営まれる場所を意識したときの呼称であろう。このような事例からみて、民俗分類は、地形学のような厳密な自然科学の分類とはちがって、一種の曖昧さや多義性——言い換えれば複数のまなざし(視覚)をもつ傾向がある、といえる。このことは、あえて付け加えるまでもないことであるが、民俗の自然認識の不確かさを意味するものでは決してない。

異なった地形に対して同一の方名を与えている例は、そのほかに「ワリ」「クチ」についても指摘できる(第3表参照)。

(f) 時間の推移(局面のちがい)によって異なった方名を与えている場合

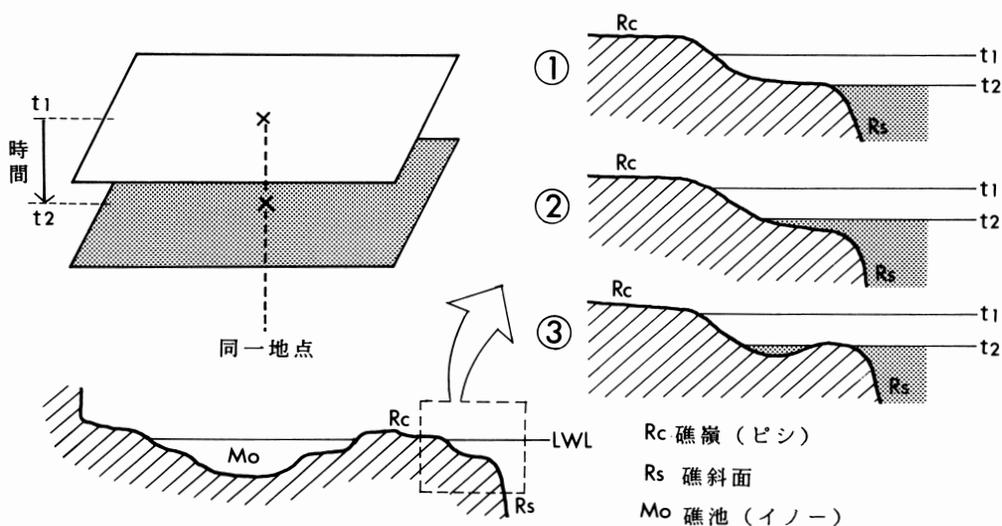
著者らは、現地での聴き取り調査で、興味深い民俗語を得ることができた。「ウジ」という言葉である。「ウジ」は「ウジュ」と発音されることもある。その民俗語(方名)がどのような地形を指しているのかを的確に説明することは容易ではない。それは礁嶺(ピシ)の前面(外洋側)に位置する平たい面を指していることはたしかだが、しかし精査を重ねていくと、その

語を単に礁縁付近に位置する平たい面と規定するだけではどうやら不十分のようである。

久高島の漁師ことばに「ウジマチュン」「ウジマチャーガイカ」などの表現がある。それらについては、かれらの間で二様の解釈が併存している。双方とも「マチュン」が「待つ; 待機する」の意である点では一致するものの、「ウジ」については、一方が「蛆」のことであり、したがって「ウジマチュン」の表現は、蛆がわくほどにたくさんの魚の群が潮に乗って外洋から礁縁に入ってくるのを待機することだ、と解する。もう一方の解釈は「潮を待つ」の意とする。すなわち、「ウジ」は「ウシュ(潮)」→「ウジュ」→「ウジ」だと解するのである。両者はまた、「ウジ」の呼称が成立する時間についても解釈を異にする。前者は、潮の流れのあるなしにかかわらず、その場所一帯はつねに「ウジ」と呼ばれるとするのに対して、後者は潮(流れ)が激しく洗っている状態に限って「ウジ」の呼称が用いられる、という。「ウジマチュン」「ウジマチャーガイカ」などの言いまわしをめぐる、こうした解釈の相違は、島の人々の間での民俗知識の伝承および変遷の観点からみて、さらに慎重な検討を要する興味深い問題を提示しているように思われる。

いずれの解釈が妥当なのであろうか。著者らは現在のところ、それを確実に判断する材料もあわせていない。しかし、このような問題のたて方は適当ではない。むしろ、サンゴ礁を利用して日常的に漁撈活動を営んでいる漁師たちの間で方名をめぐる、相異なる理解と解釈が行われているという事実を確認すること、そのもつ意味を考えることのほうが民俗分類の特徴を考察する上ではより大切なことであろう。

ここでは、島の比較的高齢の漁師たちの間で支配的であるところの解釈、すなわち《ウジ=潮》という見方によりつつ、「ウジ」の方名に



第5図 「ウジ」の解釈のための概念図

ついて一つの可能な説明を試みることにしよう。第5図は、微妙に異なる三つの地形において、時間の変化 ($t_1 \rightarrow t_2$) に伴って、同一地点であるにもかかわらず、「ウジ」となったり、あるいはまったく別の呼び名で呼ばれたりすることを概念的に表現したものである。①は、ある時間 (t_1) にはその地点が「ウジ」と呼ばれるが、時間が経過した時点 (t_2) ではその部分が干出し、もはや「ウジ」とは呼ばれないような地形である。②は、時間 t_1 , t_2 のいずれにおいても潮が被っており「ウジ」と呼ばれる地形を表している。③は、 t_1 の時点では一面潮が被さっており「ウジ」と呼ばれるが、 t_2 の時点では潮がさらに下がり、その地点が「ピシ」へと変化するような地形である。「ウジ」と呼ばれる部分は、網漁などの漁撈活動が盛んに行われる場所であり、時間とともに、漁撈活動の価値と局面が大きく移り変わる地形である。これは、まったく同一の地点であるにもかかわらず、

時間の推移によってその地形のポテンシャル（漁撈活動における価値）が大きく変化するとき、与えられる呼び名（方名）も移り変わっていくことを示唆しており、民俗分類における興味深い側面と重要な問題を提起している、といえる。

V まとめと今後の課題

以上の分析からすでに、久高島のサンゴ礁の民俗分類のいくつかの特徴がある程度浮き彫りにされてきた。今後、さらに詳細な調査によって検証していかなければならない点もあるが、以下に、地形学的な分類と対照させながら、ある程度明らかにできたと思われる民俗分類の若干の特徴を要約しておく。

1) 科学的な分類も民俗分類も、まず第一に地形のもつ示差的特徴に着目している。それが両分類の大きな指標である。民俗分類と地形学の分類が大局的にみてよい対応関係が認められ

るのは、両者の間にそのような共通の指標が存在していることに大きく起因している、と考えることが可能であろう。

2) 地形学の分類の大きな特徴として、地形の形成プロセスや発達史を考慮する点、また面的な広がり(地形面)に着目する点などを指摘できる。一方、民俗分類では、サンゴ礁と人々とのかかわりの側面、すなわち漁撈活動などの機能的な側面を色濃く反映している。そのような点は、「ヤートー」や「ワタ〔ン〕ジ」などの方名に代表される。(この機能的側面もむろんサンゴ礁の形態に規定されている)。これが、地形学的分類と民俗分類との差異を生んでおり、民俗分類の大きな特徴の一つであると考えられる。

3) 民俗分類は水深のわずかな差異などに敏感である。あるいは身体的な感覚を重視する傾向にある、といえる。そのことは、「ガマク」や「ワタ〔ン〕ジ」と呼ばれる地形の認識において如実にあらわれている。

4) 民俗分類においても、分類およびその結果として生まれる方名が安定性と永続性を保証されるためには、長年サンゴ礁を利用している漁師でなければ容易に認知し得ない「ピシミ」のような地形であれ、わずかなへこみなど、やはり視覚的なものがなければならないであろう。

5) 科学的な分類がどちらかといえば全体的な視野を何よりも大切にするのに対して、民俗分類は細部を優先している、と理解することができる。比喩的な表現を用いるならば、民俗のまなざしは「地を這う虫のような目」(等身大の視角)をもっており、他方、科学のそれは「空を飛ぶ鳥のような目」(俯瞰的な視角)を有しているといえよう。

以上に列記した久高島のサンゴ礁にかんする民俗分類の特徴をより説得力のあるものにするためには、さらに多くの角度から詳細な調査を行い検討を重ねていく必要がある。

民俗分類を規定しているファクターとして、サンゴ礁の自然(堀, 1980の表現を借りると「分類される素材である《自然》」)のほかに、サンゴ礁とかかわって存在している島の生業形態(漁撈活動など)や島の置かれている歴史的環境、そして分類に具体的な形を与えるその土地の言葉(語彙)そのものの特色などをあげることができる。わずかな環境の差異をも反映している民俗分類、漁師たちの空間認識の細部に分け入っていくためには、それゆえ、より微細なサンゴ礁の環境調査が必要となろう。そして民俗分類の観点に立って、そのようなサンゴ礁の微地形と深くかかわりながら展開されている漁撈活動の詳細な記載も不可欠であろう。さらに、長期的な課題として、たとえば久高島という一つの島におけるインテンシブな調査とともに、同じくサンゴ礁に圍繞される島々における民俗語彙との比較をとおして、その島における民俗分類の特色を位置づけるイクステンシブな研究も大切であろう。このような比較研究が可能となるためには、しかしながら今後、個別的な調査(比較研究に耐え得るような客観性をもった方名記載)を積み重ねていかなければならない。

現在、サンゴ礁の方名の記述や民俗分類にかんする研究に求められる最も重要な課題は、呼び名が与えられている環境、すなわち分類されるサンゴ礁そのものを研究者が十分に調査し理解していなければならないという点である。それなくしては、本稿で試みた「ウジ(ウジュ)」のような方名の解釈や、「ピシミ」のようなわずかな地形的なへこみに与えられた方名の客観的な記述は困難であろう。それは、単に民俗語彙を収集・整理・記載するという段階を一步踏みだし、その民俗語彙を手がかりにして人々の空間認識に迫るような研究をめざすとき、とりわけ不可欠な要件となる。

本研究は、サンゴ礁にとりかこまれた小離島、久高島の人々の空間認識を解明するという大き

な目的に到るささやかな一つのステップ(試み)にすぎない。今後検討すべき課題を多く残しているが、この種の研究があまりにも少ない現状を鑑み、あえて公表することにした。大方の批判を得ることができれば幸いである。

本研究を進めるにあたって多くの方々のご協力を賜った。久高島の漁師の方々、とくに西銘順昌、西銘順太郎、内間末広、内間末七、糸数清太郎の各氏には格別のご指導をいただいた。また、久高島のシマづくり活動に真摯に取り組んでおられる並里和博(農業)、西銘正勝(知念村役場)、西銘一彦(久高海運)、西銘喜一(スーパー・ダイヤモンド)の諸氏には、現地調査以降もひきつづいて大変お世話になった。さらに、目崎茂和氏(三重大学人文学部教授)には貴重な空中写真をご提供いただき、前門 見氏(琉球大学教養部助教授)にはサンゴ礁の地形測量においていろいろと便宜をはかっていただいた。記して、厚く御礼申し上げます。

なお、本研究の一部は1989年度日本地理学会春季学術大会で発表した。

注

- 1) サンゴ礁地域の小離島におけるサンゴ礁の資源の重要性については、Bayliss-Smith (1982) や秋道 (1980) などを参照されたい。ちなみに、Bayliss-Smith (1982, p. 62) の研究によると、ソロモン諸島のオントン・ジャヴァ環礁では、サンゴ礁を中心とする海から得られる食物資源は、島で消費される全食物のじつに20%近い値(エネルギー換算)を示している。
- 2) 筆者らの調査によると、久高島のサンゴ礁には約150余の地名が付けられている(詳細は別稿)。その地名の分析からも方名を導き出すことが可能であり、地名は方名と不可分の関係にある。つまり、地名は一般に方名に接頭辞を冠した形態をとっている。たとえば、「ウフグチ」という地名は「クチ(口)」という方名に「ウフ(大)」という接頭辞を冠した構造であり、「ウフグチ」という地名から「クチ」という方名が導きだせる。
- 3) 礁嶺(reef crest)という地形学用語は、前方礁原と同義に用いられることもあるが、本稿では「前方礁原のなかでもとくに地形的に高い部分」という狭い意味で用いることにする。したがって、礁嶺は前方礁原に包含される(前方礁原の一部である)。

文 献

- 秋道智彌 (1980) : サンゴ礁の島——食物資源の保護と利用考——。季刊民族学, 13, 47~54.
- 秋道智彌 (1988) : 『海人の民族学——サンゴ礁を超えて——』日本放送出版協会, 210ページ.
- ウォーフ, B.L. (1978) : 科学と言語学。J.B. キャロル編, 池上嘉彦訳『言語・思考・現実——ウォーフ言語論選集——』弘文堂, 103~119.
- オダム, E.P., 三島次郎訳 (1975) : 『生態学の基礎(上巻)』培風館, 441ページ.
- 川平永美・安溪遊地・安溪貴子 (1990) : 『崎山節のふるさと——西表島の歌と昔話——』ひるぎ社, 198ページ.
- 河名俊男 (1987) : 生物群集の成立基盤としてのサンゴ礁地形。月刊海洋科学, 19, 536~544.
- 菅 浩伸・作野真二 (1989) : 中部琉球・水納島の現成サンゴ礁上層部の堆積構造, 日本地理学会予稿集, 35, 194~195.
- 座間味村史編集委員会編 (1989) : 『座間味村史(中巻)』座間味村役場, 685ページ.
- 島袋伸三 (1983) : 沖縄のサンゴ礁海域の地名。南島地名研究センター編: 『南島の地名・第1集』新星図書, 42~46.
- 高田普久男・渡久地 健(準備中) : 小離島における空間認識の一側面(II)——久高島のサンゴ礁地名の分析——.
- 近森 正 (1988) : 『サンゴ礁の民族考古学——レンネル島の文化と適応——』雄山閣, 295ページ.
- 寺嶋秀明 (1977) : 久高島の漁撈活動——沖縄諸島の一沿岸漁村における生態人類学的研究——。伊谷純一郎・原子令三編: 『人類の自然誌』雄山閣, 167~239.
- 渡久地 健 (1989) : 南島のサンゴ礁と人——最近の研究の一素描——。南島史学, 33, 63~79.
- 渡久地 健・目崎茂和 (1987) : 石垣島・西表島の

- サンゴ礁地形. 日本地理学会予稿集, **31**, 112~113.
- 渡久地 健・高田普久男・玉那覇 健・富高康一 (1989) : サンゴ礁の地形とその名称——久高島の事例——. 日本地理学会予稿集, **35**, 192~193.
- 渡名喜村 (1983) : 『渡名喜村史 (下巻)』渡名喜村, 946ページ.
- 堀 信行 (1980) : 奄美諸島における現成サンゴ礁の微地形構成と民族分類. 人類科学, **32**, 187~224.
- 松井 健 (1975a) : 民俗分類の構造——南西諸島の場合——. 季刊人類学, **6**(1), 3~68.
- 松井 健 (1975b) : 民俗分類の機能——南西諸島の場合——. 季刊人類学, **6**(2), 84~133.
- 松井 健 (1983) : 『自然認識の人類学』どうぶつ社, 340ページ.
- 目崎茂和 (1980) : 沖縄のサンゴ礁と開発問題. 地理, **25**(8), 84~93.
- 目崎茂和 (1988) : 『南島の地形——沖縄の風景を読む——』沖縄出版, 185ページ.
- 目崎茂和・渡久地 健・中村倫子 (1977) : 沖縄島のサンゴ礁地形. 琉球列島の地質学研究, **2**, 91~106.
- 目崎茂和・河名俊男・木庭元晴・渡久地 健・前門晃 (1985) : 地形分類図, 『土地分類基本調査——石垣地域——』沖縄県.
- Odum, E. P. (1975) : *Ecology* (2nd. ed.). Holt, Rinehart and Winston, New York, 244p.
- Sudo, K. (1984) : Social organization and types of sea tenure in Micronesia. *Senri Ethnological Studies*, **17**, 203~230.
- Bayliss-Smith, T. P. (1982) : *The ecology of agricultural systems*. Cambridge University Press, Cambridge, 112p.
- Yamanouchi, H. and Hasegawa, H. (1988) : The distribution of sandy sediments on coral reef and beach at northeastern coast of Ikei-jima, Okinawa. *Science Reports of Faculty of Education, Gunma University*, **36**, 19~37.